

The Whisper from Amherst

エミリーのささやき

命あるものは総じて自分で自分の生涯にピリオドをうつことはできず、「死のためにとまることができない」ので、「死が親切にとまってくれ」で最期を迎えるという表現は、日本のお年寄りがよく口にする「お迎えが来る」という考え方にとてもよく似ています。

アメリカの葬儀史をひも解いてみますと、1678年頃から棺に遺体を納めて埋葬するようになりました。1800年当時、葬儀店は棺の制作と保管、そして遺体と遺族のために貸し馬車をする業務に限られていました。つまり当時の霊柩車は馬車でした。1820年には埋葬と発掘から遺体を守るために鉄製の棺が作られるようになりました。エミリーの表現では、遺体は「不滅の生」とともに馬車にゆられながら懐かしい場所を通して墓地に到着し、棺ごと埋葬されます。

“Because I could not stop for Death”

Because I could not stop for Death -
He kindly stopped for me -
The Carriage held but just Ourselves -
And Immortality.

We slowly drove - He knew no haste
And I had put away
My labor and my leisure too,
For His Civility -

We passed the School, where Children strove
At Recess - in the Ring -
We passed the Fields of Gazing Grain -
We passed the Setting Sun -

Or rather - He passed Us -
The Dews drew quivering and chill -
For only Gossamer, my Gown -
My Tippet - only Tulle -

We paused before a House that seemed
A Swelling of the Ground -
The Roof was scarcely visible -
The Cornice - in the Ground -

Since then - 'tis Centuries - and yet
Feels shorter than the Day
I first surmised the Horses Heads
Were toward Eternity -

死のために止まることができないので
死が親切にわたしのために止まってくれた
馬車には私たちだけ
いや それに不滅の生も

ゆっくりと進んだ — 彼は急ぐようすもない
わたしは 仕事も余暇も
彼の慇懃(いんぎん)さにこたえて
捨ててきた

子供たちが休み時間 輪のなかで遊ぶ
学校を通りすぎた
こちらを見つめている麦畑もすぎた
沈んでいく太陽も通りすぎた

いや 太陽が私たちを通りすぎた
露がふるえ 冷たい
わたしのガウンは 蜘蛛の巣
肩かけは チュールだけだから

地面が盛りあがったような
家の前で私たちはちょっと止まった
屋根はほとんど見えない
蛇腹(コニス)も土のなか

あれから 何世紀もたった でも
最初 馬の頭が
永遠に向いたと思った
あの日より短く感じられる